



ピッポ新聞

2007

4

No.219

年間購読料(送料込み)1500円

編集・発行 伊藤俊男

子どもの本専門店

ピッポ

〒424-0886 静岡市清水区草薙1-6-3

TEL & FAX 0543-45-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>E-mail itoh@pippo.co.jp

ボランテアって何だっけ？ 身勝手な言い分

他人様には、「なにもそんな些細なことに目くじらを立てなくたって、人間ちいせい、ちいせい」などと言われてしまいそうだが、これはもって生まれた性分だからと自分に言い訳しつつ、どうにも我慢ならなくて、ついつい口を出してしまう。何度もそれで失敗しているというのである。

先日もこんなことがあった

近くの有度山(頂上は日本平)には、かなりの広さの県有地がある。近年ここは孟宗竹がその勢力を強めてはびこっている。だから、竹の子の季節になると多くのひとが思い思いに掘って楽しんでいる。ほくもその一人だ。

3月の声を聞くと、「もうそろそろかあな？」と心はそわそわ、我慢できずに堀に出かけるのである。まだ竹の子は地面から顔をほとんど出しておらず、それを見つけて掘るのが面白い。

この山はほくのジョギングコースでもあり、週に1〜2回は走っているし、中学生の頃の遊び場の一つでもあったから様子はよくわかってい

る。県は7〜8年ぐらい前から、この地域を「里山づくり」と称して、ボランテアを募って竹を切ったり、雑木を植えたり、道を作ったりとい

うことをやっている。ボランテアに応募したグループは(中には竹墨を焼いたりしているグループもある)それぞれを楽しんでいる。

ところで、「ここ数年この県有地の竹林で気になることがある。あるボランテア団体が3月の下旬になると一定の地域を細いロープで囲ってしまい、そのロープに沿ってカンバンが何本も立つのである。

その内容は「ここは3月 日から5月連休まで入山禁止。約500名の保育園や幼稚園、子供会の子たちが竹の子堀りをするため、竹の子を掘るのをご遠慮ください。 静岡県 中部農林」というものだ。

こんなカンバンやロープを見れば、誰もが県がやっていることだと考え、文句のつけようがないのである。

それに、幼稚園などの子どもたちの為だからともある。「子どもたちのため」という言葉には、弱いのだ。初めは、ほくもこのカンバンに引っ掛かって、県が本当にやっていることだと思っていた。

が、よく考えてみると、「県がなんでこんな一部の限られたひとたちのために便宜を図るのだからか？」という疑問がうかんだのである。しかし、県有地の竹林はまだまだ広いし、敢えて些細なことを問題にすまいと考えて、これまでは何も言わずに、このカンバン通りしたがっていたのだ。

ところが今年、今度はこれとは別の場所に別のグループが「今日から5月連休まで、子どもたちが竹の子堀をするため入山禁止」 ボラン

「ティアの会」というのが道沿いに何枚も張り出された。

こんなことがまかり通れば、県有地は遠くから張り紙やカンバンだらけになってしまうことだろう。

「こういうことは黙っていれば、既成事実化されてしまうにちがいない。そして、自由に楽しんでるひとたちは、この県有地から閉め出されてしまうことだろう。と、考えたぼくは、

そこで県に電話をした!

県では管轄が中部農林事務所だと、電話番号と担当者を教えてくれた。以下がそのやり取りである。

「お聞きしますけど、県では一部の団体に県有地を占有する許可を与えているのですか」とぼく。

「いえ、そんなことは一切許可していません」担当者。

「ではこんな張り紙がありますがどういうことですか」とぼく。

「現地を確認して、とりはずすように指導します」担当者。

というわけで、その張り紙は即日取り外された。

数日後、今度は例年の場所にまたロープで囲って、立て看板が何枚も立っていた。

内容は前述の通りである。またぼくは中部農林に電話をした。

「先日電話をした伊藤ですが、今度はこ

んな内容のカンバンが立ち、ロープで囲われています。お聞きしますが、静岡県と中部農林と名前が入っていますか、貴方は先日県ではそんなことは一切していないとおっしゃいました。ではこれは明らかに官名詐称ではないのですか?」とぼく。

「現地に行つて指導します」と担当者。

数日後ジョギングをしながら通つたら、確かにロープは消えていたが、今度はカンバンにそれまでの「静岡県 中部農林」を白ペンキで消して自分たちの団体名が書かれていた。内容は全く同じで入山を禁止するものであった。

こうなるとぼくも意地だ。また中部農林へ電話をした。担当者はぼくからの電話にウンザリしている

「前と内容は全く同じで、今度は県の名前を消して、自分たちのグループ名のカンバンが立っているよ」とぼく。

「はずすように指導します」担当者。

それで降今日まで、県有地にはカンバンは立っていない。

県の担当者の今回のぼくの指摘に対する見解はこういうものであった。

「里山作りのボランティアの方が子どもたちを集めてイベントをやることは大いに結構である。しかし、そのイベントの為に地域を独占して、他の人の入山禁止にしたり、竹の子堀を禁止することは認めない。たまたまイベントの日に竹の子が掘れなくてもしかたがないことである」

今回ぼくが思ったこと

自分たちがボランティアをしている場所だからと、自分たちに竹の子堀の優先権があるのだと考えて、他の人を閉め出し、自分たちに関係のある子どもたちをまねくということは、身勝手に過ぎるのではないか。

これは、ボランティアという行為に対価を求めているに等しいのである。こういうのを言葉を換えて表現すれば「他人の禪で相撲をとる」ということになるのである。

それに、このボランティアは「子ども竹の子堀」のためと理由を挙げているが、竹の子というのをご存知のように、わずかの期間に掘つても掘つても次々に出てくるのだから、そこを1ヶ月以上も独占しているということとは、子どもたちのためより自分たちのために独占している期間の方が長いのではないだろうか?と思うことである。

県の「里山作り」の考え方もおかしいと思う。

元々この土地は、バブル期に有度山開発計画というのがあって、(できたのは、今ではほとんど使われることのない野外劇場だけで、県民の多くはその存在すら忘れていたのではないだろうか)そのため、地元の農家から買収した山なのである。

バブル崩壊で山は長い間放置されたままになっていた。当然山は荒れて、一部で崩落したり、放棄された茶畑やミカン畑などに宗孟竹が侵入してきていたのだ。

さすがに、県も放置したままにして置けず、ボランティアを募って「里山作り」と称して、少しずつ手を入れるようになったのである。

「里山作り」をやるのは結構だが、かつてここは立派な里山(生きた山)だったのだ(今も個人所有の山はミカンやお茶畑や雑木林になっている)。

だから、かつての持ち主や地元農家にまず協力をあおぎ、その上で、ボランティアが協力して自然豊かな「里山作り」を再構築していったらどうだろうか？

祖先から受け継いできた山を知っているのは地元の農家の人たちに勝るものはないのだ。そこに、よそからの考え(素人の発想)なども取り入れていく。ぼくならそうするけどね。

それに第一、簡単に「里山」と言うけれど、人の生活と無関係に里山など存在するはずもないのである。「里山作り」はそこに暮らしの基盤を置いている人たちの存在抜きには考えられないのである。

ぼくなら、麓の土地を地元の農家に協力を仰ぎ、県民が自由に使える畑にし、場合によっては週末宿泊できる小屋なんかも手作りで作ったらどうか。

山の斜面は今ある雑木を活かしながら、さらにこの地にかつて生えていたであろうシイやタブなどを中心に雑木を植林するけどね。

それにしても、ぼくは最近感ずるのだが、この国のかんりの数の大人(老若男女)はあまりにも身勝手にすぎないだろうか？

ねえ、この本読んだ

『みんなおなじ でも みんなちがう』

(奥井一満・文 得能通弘)

写真 小西啓

介・AD

880円 福

音館書店)

この絵本は見

開きで同じ物

の写真がいつ

ぱい載っています。

例えば空豆、さやの中

には1個しか入っていないのや2個や3個の

があったり、同じさやのなかでも大きいの

や小さいのがあったりします。でもこれは

空豆であることでは「みんなおなじ」でも

みんなちがう」のです。改めてこういう

方法で見せられると大人でも妙に感心させ

られます。 かがくのとも傑作集



『ぶーぶーぶー』 (こかぜさち・文 わき

さかかつじ・絵

600円 福音館

書店)

012えほん 単

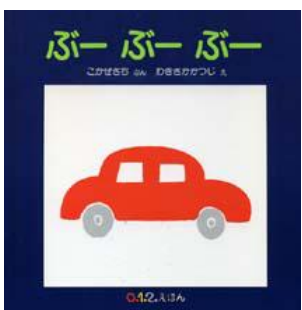
純な言葉「ぶーぶー

ぶー」「ぶーぶー

ぶー」などとも

に。右から左に次々

に色の違った自動車が出てくる。子どもは



次はどんな車かな?と期待感が膨らむことだろう。最後の展開がこれまた子どもには安心感と喜びを与えてくれる。大きなトラック(これおおかあさんかな?)に登場した車が全部積み込まれて揃ってしゅっばつするのだからね……。

『おまかせツアー』 (高島那生・作 12

60円 理論社)

動物園の動物たちどうやら旅行に出かける準備をしているようです。

いよいよ飛行機に乗り込んで出発です。

その間動物園はお休みです。

さて、飛行機

から動物たちはパラシュートで世界中へち

らばっていきます。シロクマさんは浜辺に

降り立ちました。でもシロクマはどこだろ

う?ここだよって、声がする。見ればクワ

クマ、でも浜でのんびりしてたら日に焼け

たんだって……。他の動物たちは何処で

どんな旅してるかな?



『ハナちゃんとパ

ンピせん カーニ

バルへいく』(石

津ちひろ・文 荒

井良二・絵 10

50円 理論社)

吐く息が白くなる

ほど寒い朝、ハナちゃんとバンビさんはさ
んぼに出たのですが、ハトの後を追っていつ
たら、穴へ落っこちてしまいました。つい
たところは夏の砂漠。ピエロに導かれてカー
ニバルの中にはいつていつたら・・・。
この絵本のピエロの話す言葉が回文になっ
ている。

『ぼくが生まれた音』 (近藤等則・文 智
内兄助・絵
1890円
福音館書店)

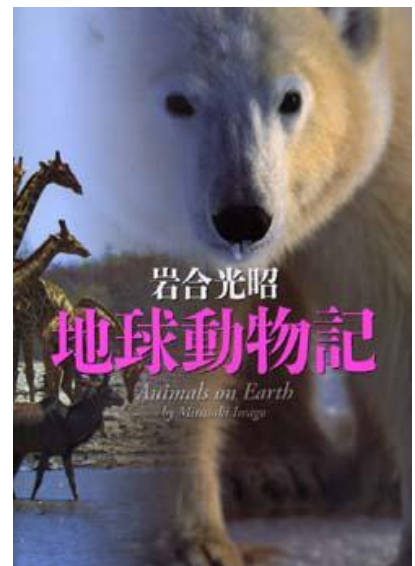


音楽家の記憶
の中の最初の
音は生まれた
故郷の波の
音。そこから
始まり、人生
の幼いころの
記憶の音をたどって一冊の絵本に。絵は幼
なじみの画家の智内兄助氏のおどろおどろ
しくも懐かしい絵が読者を戦後の日本の素
朴な世界に連れ戻してくれる。一人は音楽
家一人は画家として世界を舞台に活躍する
二人の幼なじみの合作の絵本。

『地球動物記』 (岩合光昭・作 4935
円 福音館書店)

本書は、動物写真家の岩合さんが30数年か
けて、世界各地のさまざまな野生動物の姿

を撮った写真集。1月、日本では雪の中で
活動する日本ザルのすがたがあり、おなじ



月遠くオーストラリアは夏、オーストラリ
アアシカの一家が海で遊ぶ姿がある。と言っ
た具合に月ごとにとまとめた一大動物写真集。

この写真集を見ていると、つくづくこの
地球は人間だけがいきているのではないこ
とを実感する一方で、人間の傲岸さが今更
ながら恥ずかしくなる思いである。人間の
経済活動による地球温暖化がこうした仲間
の多くの種を絶滅に追いやると思われる。
現在を一人ひとりに問いかける書でも
ある。



『いちばんたい
せつなもの』
(八百板洋子・
編・訳 157
5円 福音館書
店)

バルカンの昔話。この昔話集は歴史が
古く、また歴史に翻弄された人々に伝わっ
てきたバルカン半島に位置する国々の話。
これを読むと、バルカンの人びとはおおら
かに、しぶとく、ユーモアを忘れず生きて
きたことが知れる。セルビアの「あの世か
らきた男」なんて話を読むと、「そうなん
だ、騙されて絶望するより、人間にはこの
度し難い、おおらかさがあるから生きられ
るんだ」なんて思えて嬉しくなってしまう。

『黒ばらさんと魔法の旅たち』 (末吉暁子・
作 牧野鈴子・絵 1260円 偕成社)



は。飛行術と
変身術。近頃
は世間が魔法
ブームとかで
黒ばらさんも
おおもてで
「悩み事」相
談などやテレビ出演に大忙しです。しかし、
その魔法も杖をポールペンに替えようと試
みたのだが、歯ブラシになってしまっ
と、近頃は少し陰りが出てきたよう
と、そこに事件が発生。魔法学校に送りだした
超能力少年「ひでくん」が行方不明になっ
たという。黒ばらさんはひでくんを探しに
旅立った。まっていたのは・・・。